住民の里山活動の運営

小西一郎（ナシオン創造の森育成会）

ナシオン創造の森育成会（以下、育成会）は設立６年を過ぎ、活動も順調に進んでいることから、育成会の組織運営の方式（方針による管理）を紹介します。

１．ナシオン創造の森の概略

ナシオン創造の森はＪＲ福知山線の西宮名塩駅の北側に広がる東山台団地に接し、宅地開発に適さなかった複雑な地形のナシオン創造の森は、面積１４ha で流紋岩質溶結凝灰岩地質の上に広がる、概ね南西斜面の放置山林。現在は西宮市が所有している。東山台団地開発以前は名塩地区の入合い山の里山で、江戸時代は有馬マツタケの産出地として村人たちによって大切に管理されていた。

２．育成会の結成

東山台の住民が自分たちで宅地に隣接する放置山林を整備しようと、2003 年に自治会主導で「創造の森管理委員会」を結成したのがきっかけである。兵庫県立大学教授の服部保先生にご指導をいただきながら（図-1）、会員は三田市の「森の学校」に通い、里山活動について勉強を始めた。「森林インストラクター」有資格者１名、「ひょうご森のインストラクター」有資格者２名になった 2006 年、森林ボランティア団体として、正式に『ナシオン創造の森育成会』を立ち上げた。

３．育成会の特徴

育成会は現在、会員数 29 名、会員平均年齢 63 歳、という高齢者の小さな団体である。そのような訳で、活動は、「安全」は当然として、「ゆっくりでいいから、確実な仕事をしよう！」をモットーとしている（図-2）。育成会立ち上げのいきさつから、育成会会員は東山台の住民だけで構成されている。

ナシオン創造の森について、会員は『私たちの森』との意識を持ち、住民は住まいに接して存在する森の景観などから、生活環境の一部として、『私たちの森』との意識を潜在的に持っている。

４．方針による運営管理

１）理念：

育成会の前身、「創造の森管理委員会」時代に、活動の理念を次のように策定した（図-4）。

①「人と自然の調和と共生」をめざす

②子や孫に故郷の森を残し

③森づくりを通じて、歴史を残し、人づくり・街づく

図-1. 服部先生の里山講義で勉強

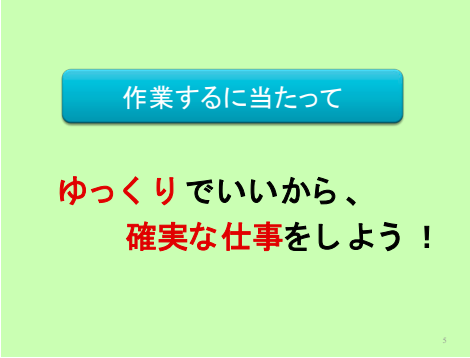


図-2. 仕事のモットー

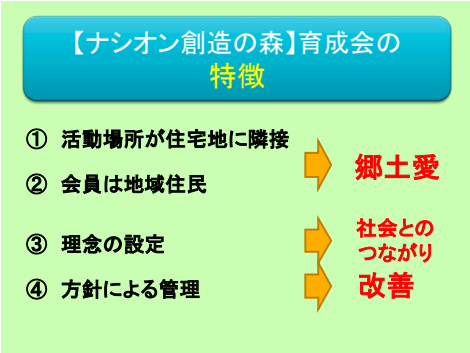


図-3. 育成会の特徴

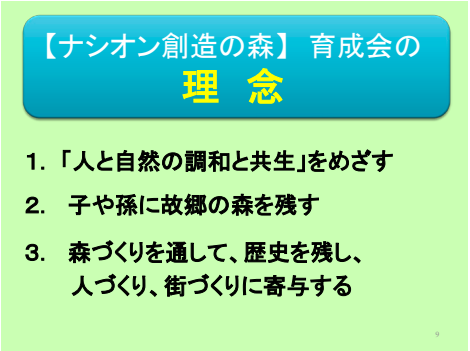


図-4. 育成会の理念

りに寄与する

ここで、③の項目は、会員が住民で構成されている育成会だからこそ出てくる発想であろう。これが郷土愛につながり、新しいまちの文化の醸成にお役に立ちたいと願っている。（図-3）この理念は、育成会設立総会で会員全員の賛成を得た。

２）めざす姿（目標林）：

これから育成する森の目標林を「めざす姿」と呼ぶことにした（図-5）。この設定に関しては、会員から意見や希望が議論百出したが、兵庫県が定めた里山の目標林「夏緑高林」を基本的な目標林とし、「めざす姿」の第一項に掲げた。その他の項目は里山の機能として挙げられているものを住民の立場・視点で盛り込んだ。これも、育成会設立総会で、会員全員の論議の末、賛成を得た。

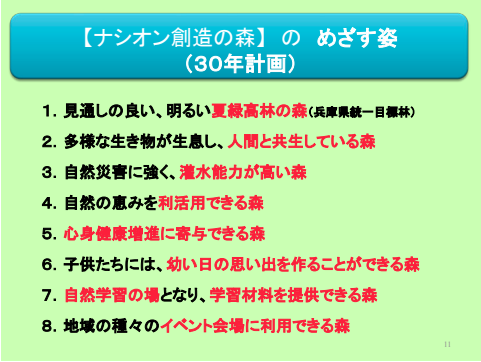


図-5. ナシオン創造の森の「めざす姿」

３）基本構想：

「めざす姿」の内容を『再生の森』『活用の森』『育成の森』『保全の森』に大きく分類して、ナシオン創造の森を４ゾーンに分けた（図-6）。

『再生の森』は団地開発時に大きく自然が失われた場所に緑が回復するようにするゾーンである。

『活用の森』はお祭りひろばを中心に、住民が森に集まり、様々なイベントを開催したり、キノコ栽培や木工作をしたり、森の楽しみを享受できる場所及び活動のセンターとした。

『育成の森』は放置された森を「めざす姿」に育てていくゾーンで、自然学習のセンターとした。

『保全の森』は、急斜面地なので、会員が作業に熟練するまでは管理外のゾーンにした。またこのゾーンは、『育成の森』と比較する対照区としての役割を持つ。

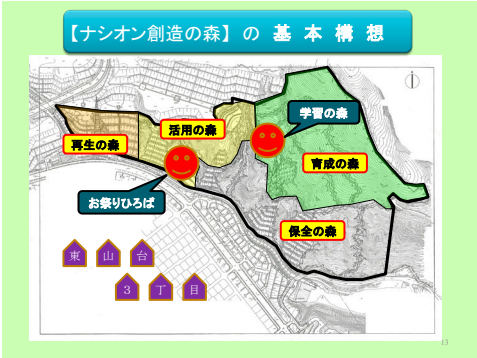


図-6. ナシオン創造の森の基本構想

４）16 区画の林分とそれぞれの「めざす姿」：

４ゾーンを基本構想として、地形や植生を考慮して合計 16 区画の林分に区分した。そして、各林分についてそれぞれの「めざす姿」を具体的に設定した（図-7）。

このように 14ha の山林を全体としては夏緑高林とし、その中に種々なタイプの林が存在する、変化に富んだ里山になるように設計した。これも育成会設立総会で会員全員の賛成を得た。

【ナシオン創造の森】16区画の目標林

基本構想	区画NO.	目 標 林
保全の森	1	管理外（対照区）
再生の森	2	ＵＲ管理(法面)
再生の森	3	UR管理(法面)(No. 2の対照区)
育成の森	4	10年間は管理外
育成の森	5	林床が整備され、風通しのよいヒノキ林
育成の森	6	林床が整備され、風通しのよいヒノキ林
育成の森	7	10年間は管理外
育成の森	8	林床が整備され、風通しのよいスギ林
育成の森	9	園路からコバノミツバツツジの群生が楽しめる落葉樹林
育成の森	10	園路からコバノミツバツツジの群生が楽しめる落葉樹林
育成の森	11	園路からコバノミツバツツジの群生が楽しめる落葉樹林
活用の森	12	水棲昆虫が生息している地区
活用の森	13	イベントを開催できる【ナシオン創造の森】のセンター
活用の森	14	生産性の高いキノコ栽培地区
活用の森	15	【ナシオン創造の森】の眺望台
育成の森	16	明るいコバノミツバツツジの群落林

図-7. 16 区分の「めざす姿」

５）長期計画：

16 区画の林分の「めざす姿」を何時までに実現するかを定めたのが長期計画である。いわば、ナシオン創造の森全体の「めざす姿」完成へのマイルストーンである（図-8）。

計画は 30 年計画とした。30 年にした理由は、①皆伐した森が成木林となるまでには 30 年かかること、②現在の会員がその「めざす姿」の達成を自分で確認できる最短期間であること、などからである。

16 区画の林分の「めざす姿」を実現するには、どのくらいの期間を必要とするかを目論見、どの区画を何時から着手するかの順番を決めて、30 年計画を策定した。長期計画は、５年ごとに見直すローリングプランにしてあるので、時代の変化に対応できるようにしてある。これも、育成会設立総会で会員全員の賛成を得た。

６）単年度活動計画：

長期計画の中の当年度の目標を 12 ケ月間で達成できるように計画を示したのが、単年度活動計画である（図-9）。これも毎年の年初の総会にて、会員の承認を得て実行している。

図-9 は 2010 年の単年度活動計画を例として示した。この中で No. 7 区画は長期計画の中では管理外の区画であったにも係わらず、2010 年には間伐作業になっている。これは、前年度の植生調査方法が不十分で、コドラートの広さを 10m四方から 20m四方へ広げることをご指導の先生から助言いただいたので、急遽、単年度活動計画に組み入れたからである。

７）活動：

森を育てる活動のリーダーは単年度活動計画に従い、事前に作業設計しておいた作業の目標・内容などを作業当日の朝に会員に説明して、作業に入ることにしている。これによって、会員は当日の作業目標が明確になるので、目標達成できた時は、その達成感を味わえる。私の経験からいうと、ボランティア活動では、活動した後の達成感が、次の活動の大きな原動力になっていると考えている。

８）活動の予実対比：

その日の作業が終わると、会員は休憩場所に戻り、汗を拭き雑談しながら、今日一日の作業の振り返りをすることが多い。その日の作業結果や作業の進め方などについての感想や問題点などが話し合われることが多く、これが結構、次回の作業の課題や解決策を与えてくれることになり、大切な時間である。このとき、リーダーは内容をメモっておくとよい。このメモを年間にまとめると、次年度の活動計画に反映できることになる。

ここでは年間の活動目標と実績を対比させた表（図-10）を挙げておく。

９）未達成項目の原因解析：

作業後の雑談の中から出てきた反省や問題点を解析し、その真の原因を４M（Material, Machine, Method, Man）に分けて考え、真の原因を探ることにより、対応策を見つける。これをまとめて次年度の活動計画の中に組み入れるようにしている。

例として、2010 年度の未達成項目の原因解析表（図-11）を挙げておいた。

図-8. 長期計画

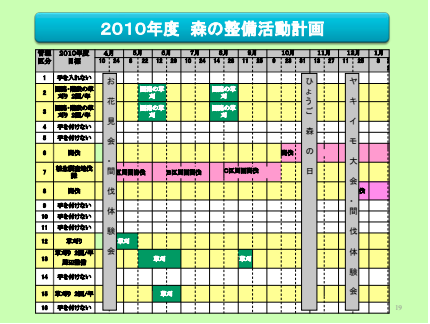
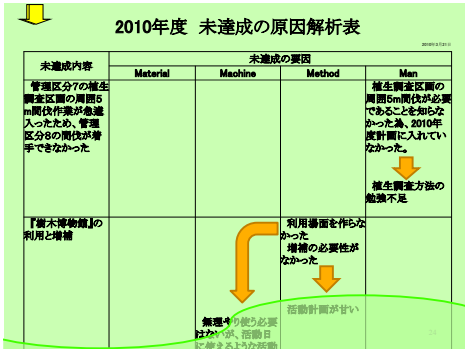


図-9. 2010 年度単年度活動計画

2010年度 方針・活動項目の活動予実対比表

方針	活動項目	目標	実績	未達成内容
1. 森を育てる	管理区分２，3	草刈完了	実施完了	
	管理区分6	間伐完了	完了できず	管理区分7に時間が取られた
	管理区分7	植生調査ABC区の周囲5mの間伐完了	新設活動実施完了	
	管理区分8	間伐完了	未着手	管理区分7に時間が取られた
	管理区分１2	草刈完了	実施完了	
	管理区分１3	草刈完了	実施完了	
	管理区分１5	草刈完了	実施完了	
2. 森に学ぶ	小3自然体験学習のサポート	年3回実施	実施完了	
	[illegible] ウィークの受	生徒10名受け入	実施完了	

図-10. 2010 年度活動予実対比表



2010年度 未達成の原因解析表

未達成内容	未達成の要因			
	Material	Machine	Method	Man
管理区分7の植生調査区画の周囲5m間伐作業が急遽入ったため、管理区分8の間伐が着手できなかった				植生調査区画の周囲5m間伐が必要であることを知らなかった為、2010年度計画に入れていなかった。 植生調査方法の勉強不足
『樹木博物館』の利用と増補		無理や[illegible]り使う必要はないが、活動日に使える工夫が活動	利用場面を作らなかった 増補の必要性がなかった	活動計画が甘い

図-11. 2010 年度未達成の原因解析表

１０）２０１１年度の単年度活動計画：

今年度の反省と問題点の解析から対応策を盛り込んだ次年度の単年度活動計画を策定し、年初総会にて、会員の承認を取ることにしている。例として、2011 年度の単年度活動計画を挙げておいた（図-12）。

図-12. 2011 年度単年度活動計画

５．里山活動の方針管理のメリット

このように、企業などで使われている管理工学の一手法、方針管理の手法はボランティアの里山活動にも有効であると考えられた（図-13）。

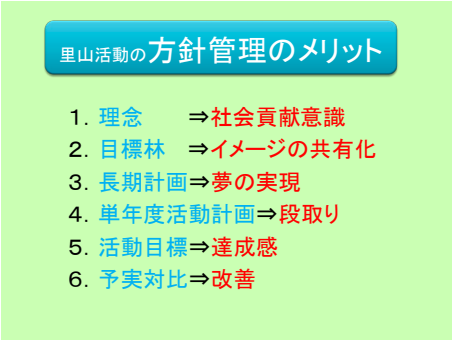


図-13. 方針管理のメリット

１）理念：

いろいろな価値観を持って活動に参加する会員に、活動のより高い次元の目的を共有化することにより、自分たちの活動が社会に貢献できているとの喜び・満足・誇りにつながっている。

２）目標林：

活動対象の森の将来象・イメージが会員間で共有化されるので、日常の作業中でこの木を「伐る」「伐らない」の揉め事がなくなる。また、作業完了後の達成感も会員間で共感できる。

３）長期計画：

活動対象の森全体の「めざす姿」を実現していく道程表としての役割を果たしている。会員が活動目標を見失わない役割を果たすとともに、活動の目標統一の原動力ともなっている。

４）単年度活動計画：

一年毎の目標が明確なので、活動の段取りもし易く、予算も具体的で無駄がなく立案でき、年度終りの達成感も会員全員で共有できる。

５）活動目標：

活動日ごとの作業の目標が明らかなので、作業に慣れた人は不慣れな人を助け、その日の目標を全員で達成する助け合いの精神が宿ってくる。ここに会員間の絆が強くなり、チームワークが生まれてくる。

６）予実対比・未達成原因解析：

年間活動の計画と実績との対比を行うことにより、未達成課題への意欲が出で、次年度への英気を養うのに、大きな力となっている。

６．育成会の活動内容

今まで述べてきた運営方式による育成会の活動内容について簡単に紹介する。

育成会の活動は４分野あり、これを育成会では「活動の４本の柱」と表現している（図-14）。

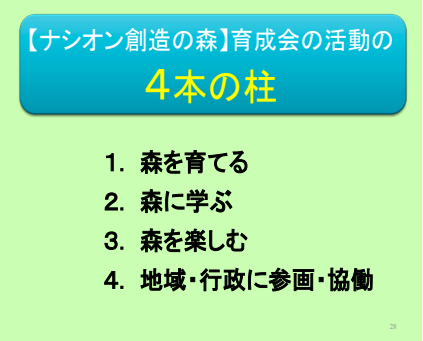


図-14. 育成会の活動４本の柱

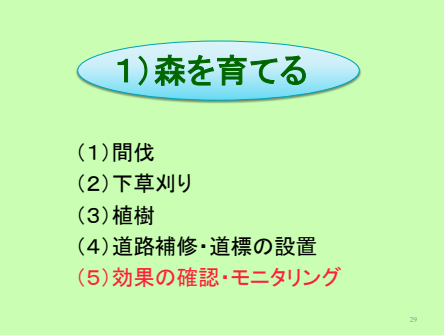


図-15. 森を育てる活動

１）森を育てる活動：

森を健康で元気にするための活動。活動の内容（図-15）は、皆伐・間伐・除伐・林床整理・草刈・林道の補修・道標の設置補修など、他の森林ボランティア団体の活動と同じである。ここでは、この活動の効果をモニタリングした結果を紹介する。

10m四方のコドラートを設定し、皆伐前に毎木調査をしておいてからコドラート内を皆伐し、コドラート内の植物の調査を毎年実施した。皆伐前・皆伐５年後のデータを比較すると、明らかに、皆伐５年後は皆伐前より植物種数が増加している（図-16）。また、この５年間の植物の消長も分かり、ナシオン創造の森での植物遷移の姿を垣間見ることが出来る。

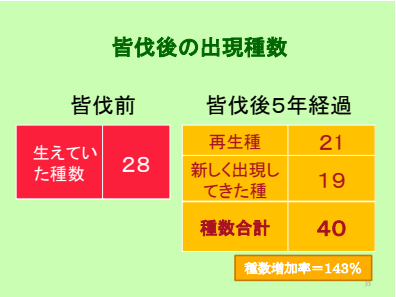


図-16. 皆伐後の植物出現種数

２）森に学ぶ活動：

この活動（図-17）は、会員自身が森に関して勉強するだけでなく、兵庫県が実施している小学３年生の自然体験学習のサポート活動（図-18）や中学２年生のトライやるウィークで自然体験活動の指導、さらには住民への自然環境に関する啓発活動などである。最近では、大学生の社会貢献活動ゼミで講演や指導などの依頼が入ってくるようになってきた。

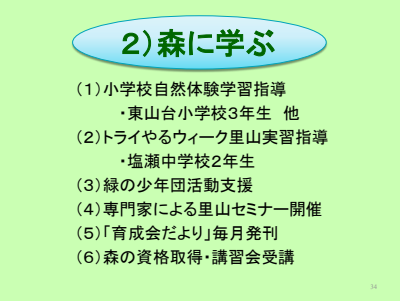


図-17. 森に学ぶ活動

３）森を楽しむ活動：

森の間伐材でキノコを栽培したり、間伐材を利用して木工作をしたりするだけでなく、住民を森へ招いて森に親しみを抱いてもらえるようなイベント開催をしている（図-19）。

図-18. 小３の自然体験学習

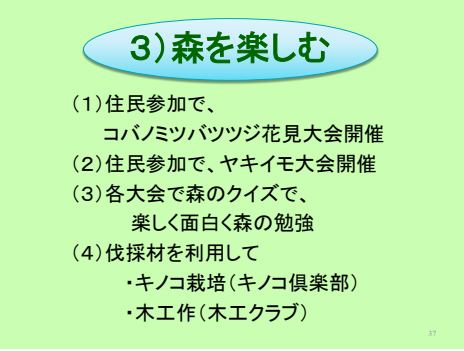


図-19. 森を楽しむ活動

現在では、春にコバノミツバツツジの花見会（図-20）、冬にはヤキイモ大会を開催している。これらのイベントでは、単に楽しむだけでなく、参加者に森に関するクイズを出して、楽しく勉強もしてもらえるような工夫をしている。

図-20. 花見大会

４）参画と協働：

地域社会や地域団体との参画と協働、西宮市や兵庫県との参画と協働の活動（図-21）である。地域社会との活動では、自治会主催のお祭りに育成会も参加出店して、ナシオン創造の森で採取した木の実を用いて子供たちにオブジェを作らせたり（図-22）、社会福祉協議会との協働で服部先生に生物多様性のお話を伺う地域フォーラムを開催したこともある。また兵庫県や西宮市から環境活動に関する協力要請がある場合は、優先して参加・協力・協働している。現在、西宮市の「生物多様性にしのみや戦略策定協議会」（委員長：服部保先生）の委員として参加している。

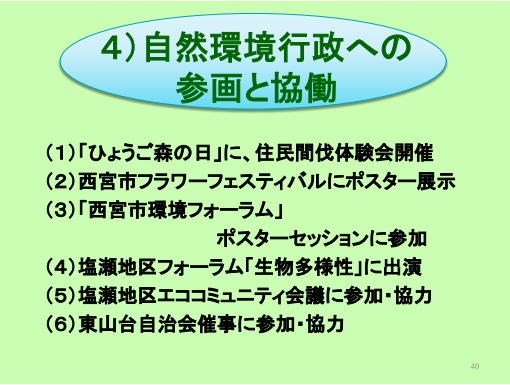


図-21. 参画・協働

図-22. 東山台サマーフェスティバルに参加

7．最後に

最後に、育成会の活動と地域社会との関係について育成会の考えをご紹介したい。

昨年秋に『人と自然の博物館』で開催された橋本佳延先生の「里山の生物多様性」のセミナーで、先生は、里山の機能として里山には「文化」機能があるとの話をされた（図-23）。既に服部先生は新しい里山のスタイルとして、「文化林」「都市林」の概念を提案されている。育成会では、地域社会との結びつきは切っても切れない関係にあり、育成会の活動と「森・人・まち」との関係を次のように考えてきた（図-24）。

図-23. 里山の機能

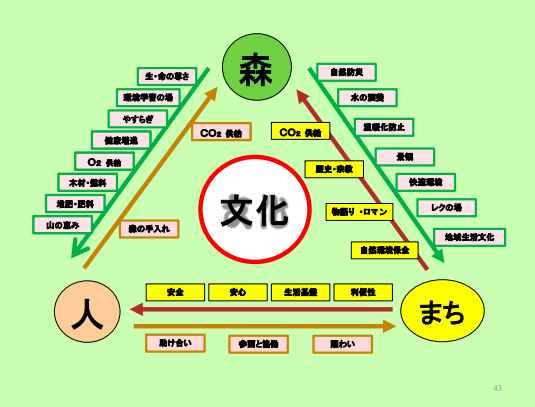


図-24. 里山と地域文化

森と人との関係においては、人は森からたくさんの恩恵を受けている。昔の里山ではそのお礼返しとして村人たちは森の世話をしてきたが、最近ではそのお礼返しがなされなくなり、森は元気をなくしている。また、森とまちとの関係に置いても、まちは森からいろいろな恩恵を受けているが、最近ではお返しどころか、森を開発・破壊していることの方が多い。そのお蔭で、温暖化が進んだり、雨が降れば直ぐに土砂崩れが発生したり、イノシシがまちに出没したりするようになった。

人が森にチャンとお返しをしていた頃のように、人が森のお世話を自ら進んで行うような地域文化の再構築が必要であり、私たちの地域で育成会がその尖兵となって、新しいタイプの里山、「文化林」「都市林」を実現できるような「文化」を醸成して参りたいと考えています。

今後とも、皆様のご支援とご指導をよろしくお願い申し上げます。